第６回国語教育カフェ・講演（2011.12.24　マーメイド・カフェ la place）

東アジアの仏伝文学・ブッダの物語と絵画を読む
―日本の『釈迦の本地』と中国の『釈氏源流』を中心に―

立教大学　小 峯　和 明

仏教の生成と展開に応じて東アジアにひろまったブッダの物語（仏伝）をめぐって、日本の１５世紀に作られ、以後１９世紀に至るまで絵巻や絵本がたくさん制作された、お伽草子『釈迦の本地』を中心に、物語と絵画の関係をめぐって検討したい。母マーヤ（摩耶）はブッダを産んで一週間後に亡くなり、須弥山（しゅみせん）頂上の天界に生まれ変わる。その後、悟りを開いたブッダが弟子を引き連れて天界まで説教に赴き、二人が対面する劇的な場面がある。また、そのブッダが天界に行くのを宿敵のデーバダッタ（提婆達多）や外道が妨害しようとし、龍に変じたブッダの弟子の目連と須弥山で壮絶な戦いを演ずる場面がある。いずれも宇宙の中心である須弥山世界を舞台に展開する物語であり、これらふたつの場面に焦点を当てて、物語の言語だけではない絵画の表現力とあわせて双方の関係を追究し、日本のブッダの物語の意義を検証し、さらに東アジア世界にも目を向け、ほぼ同時代の中国の明代に制作された『釈氏源流』とも比較してみたいと思う。

『釈迦の本地』須弥山世界をめぐる

今年（2011年）の五月、手塚治虫の漫画「ブッダ」がアニメとなって公開されたのにあわせ、東京の国立博物館で、漫画とガンダーラの仏像とをあわせ並べた展覧会が開催され、かなりの反響を呼んだ。仏伝はもともと図像イメージと深く結びついており、仏生会（潅仏会）や涅槃会をはじめとする法会仏事とかかわり、説経・経釈、歌謡（今様、和讃）とも連関しあって、仏伝図、釈迦八相図、涅槃図、八相涅槃図などが、壁画、掛幅図、あるいは絵巻、絵入り本、漫画、映画等々、さまざまな媒体で表現されてきた。石窟の彫刻や彫塑像など造型も少なくない。これも私にいう、〈法会文芸〉の一端を占め、メディアミックスのかたちでひろく浸透した。仏伝経典から説話集（因縁集）、仏伝物語へ、という一連の流れを背景とする、〈物語〉の一原点に位置づけうる領域である。

とくにここでは１５，１６世紀の室町期に制作されたと思われるお伽草子の『釈迦の本地』を対象にし、物語と絵画の関連をとらえてみたい。『釈迦の本地』は室町期にとどまらず、以後、近世の１７から１９世紀に至るまで、絵巻や絵本がたくさん制作された。日本の仏伝のなかでも最もひろまり、親しまれたテキストで、日本人の感性にあわせて作り替えられた仏伝物語の典型といえる。とくに近世には絵巻や絵本の制作が増え、版本が出版され、古浄瑠璃や説経節など語り物でもひろまった。

文章だけのテキストで最も古いものに１６世紀後半の写本があり、絵巻でもニューヨークのスペンサーコレクション本が最も古く、同じ１６世紀の写本とみなせる。スペンサー本についでジュネーブのボドメール本、筑波大学図書館本は絵入り冊子本で、１６世紀末から１７世紀初めの写本、また１７世紀中頃の朝倉重賢筆の詞書をもつ金刀比羅神社本の絵巻があり、ロンドンの大英博物館には絵巻と絵入り冊子本の二種類があり、他にプラハの東洋美術館本もあり、海外に優れた絵巻、絵入り本がたくさん所蔵されている。

仏伝の物語は、

天上界の菩薩だった釈迦がこの世の人々を救おうとして、人間界に降臨、白象に乗って母摩耶夫人の胎内に宿り、北天竺の小国である迦毘羅衛国の王子悉達太子として、摩耶の脇の下から誕生する。成長して結婚して男子をもうけるが、人生の苦悩にめざめ、城を脱出して出家、苦行の末に瞑想に入り、菩提樹下で悟りを得る。悪魔たちが誘惑したり脅したりするがことごとく排除し、悟りが真のものであることを証明し、人々に教えを説き、次第に弟子たちが増えて教団を形成し、国王や長者をはじめ多くの人々の帰依を受け、尼連禅河のほとりで八十年の生涯を終え、涅槃に入る。

というものだが、『釈迦の本地』には、これに加えていくつか特徴的な話題がある。人生の苦悩にめざめるきっかけとなる四門出遊の場面では、老人、病人、死人、僧とそれぞれ東南西北の門を出て出会うが、それぞれが春夏秋冬の季節に対応する、いわゆる四方四季に描かれる。お伽草子によく見られる趣向で、異界をあらわす記号となっているが、それが応用されたものである。また、鳥の親子を見て母のいない自分のみを嘆く段をはじめ、釈迦と母摩耶との再会、あるいは釈迦と我が子ラゴラとの再会など、母と子、父と子といった親子の情愛にテーマの重きが置かれている。さらには提婆達多ら釈迦に敵対する外道との対決も繰り返し描かれるのも特徴的である。

ここでは、以下の二つの場面をとりあげる。

○母摩耶は釈迦を産んで一週間後に亡くなり、須弥山頂上の天界・忉利天に生まれ変わった後、悟りを開いた釈迦が弟子を引き連れて天界まで説教に赴き、二人が対面する劇的な場面。

○その前段階として、釈迦が天界に行こうとするのを、宿敵の提婆達多や外道らが妨害しようとしたため、釈迦の命を受けた弟子の目連が龍蛇に変身して、須弥山で壮絶な戦いを演ずる場面。

宇宙の中心たる須弥山がバトルの舞台となっている。須弥山での戦いといえば、阿修羅と帝釈天の対決が有名であり、そのバージョンとも考えられる。そこで、須弥山とはどういう世界であったか、これも近年明らかになってきた図像からみておこう。

須弥山とは古代インドの世界観の中心に位置する宇宙の根源に当たる山で、ここでは、１０世紀の中国、唐代に作られ、敦煌にあった須弥山図と、日本の１４０２年、１５世紀初頭、室町期の「日本須弥諸天図」をあげよう。前者は、現在フランス国立図書館のペリオ文書所蔵、後者は、アメリカのハーバード大学フォッグ美術館所蔵の絵巻で、奥書から京都の醍醐寺の学僧の手になることが明らかな絵巻である。こうした図像が修法上の観想の重要な媒体になっていたわけである。

この須弥山の頂上が帝釈天のいる忉利天であり、母摩耶はここに生まれ変わっており、『釈迦の本地』のテキストでは摩耶は帝釈天の妻となっていたとされる。摩耶が帝釈宮の波利質多羅樹の下にいたという。

話題を『釈迦の本地』に戻すと、神通外道たちは須弥山を四巻きに巻いて一万の頭から三万の口を出して毒を吐き、天下を暗闇にする。大自在天が釈迦に通報、釈迦は神通第一の弟子目連を派遣、目連は須弥山を十五巻きにして四万の歯や鉄の嘴で外道を撃退する。須弥山を舞台に外道と目連の激闘が展開されるが、いずれも須弥山をぐるぐるまきにして毒を吐いたり、鉄の歯や嘴で闘うわけで、龍や蛇に変身していることをあらわすのだろう。

現在の感覚では、壮絶なバトルの一大スペクタクルとして絵画になりやすいとの印象をもつが、従来の『釈迦の本地』の伝本ではなかなかこの場面を絵画化したテキストがなかった。せいぜいこの場面を絵画化しているのは金刀比羅本と中野幸一本くらいであり、しかも目連は僧形のまま、外道も鬼の姿で、叙述に即した、すさまじいまでの形象はなされていなかった。絵画化の感覚が今と

違うのかと思っていたが、ところが、そのような見通しがまったく誤りだったことが、その後明らかになった。

まず、すでに紹介されていたものに（原口志津子）、富山県八尾の本法寺蔵「法華経曼荼羅」があり、そこには、目連が龍に変身して須弥山に巻き付き、外道と闘う壮絶な姿が描かれており、これが『法華文句』に拠ることが明らかにされている。『釈迦の本地』の物語の原拠もまたこれにあることもほぼ疑いないであろう。

しかもその矢先、昨年京都の思文閣書店から出た目録に思いもよらぬ図版が掲載されていたのである。室町期とされる『釈迦の本地』の新出絵入り本である。それがすなわち巨大な白い龍蛇が須弥山に巻き付き、右手から口を大きくあけて威嚇しているのに対し、左手下に弓矢刀剣の武器を持ち、黒雲に乗って逃げ出している鬼の一団が描かれ、その上方には白雲に乗った釈迦と弟子たちがいる。白雲には黄色と赤の色彩がついている。山頂は画面の上端全体にかかる金の雲で隠されている。この山は草木の緑と岩肌に覆われた富士山に見まがうような造型で、須弥山といえば逆三角形で描かれる一般の形状とは異なっている。今まで絵画化されていないと勝手に推定していた図像がきわだって形象されていたわけで、『釈迦の本地』の諸本からも特異な伝本であることが判明する（ただし、この本には錯簡があり、この場面が現状で最初に出てくるのは不審。また、この段は龍の帰依をめぐる、袋中の『琉球神道記』にも関連の条がみられ、それなりにひろまっていた物語であったことが知られる）。

そうして、目連に外道を撃退させ、釈迦は天上界の母摩耶の教化におもむくが、ここでさらに注目されるのが釈迦と母摩耶との対面場面である。釈迦と弟子たちが摩耶と対面するが「弟子達に混じった釈迦が誰だかわからない」という摩耶に対して、釈迦は「乳を飛ばして口に入ったのがそうだ」といい、はたしてそうなったという劇的な場面。本書の山場のひとつで、すでに経典や『今昔物語集』にもみえ、さらに法会唱導資料の『金玉要集』にも、「摩耶、誓ヲ発シテ云ク、若シ仏、真実ニ我ガ昔、悉達太子ヲ生ミシ所ナラバ、我身ヨリ当ニ乳汁ヲ出シ、仏ノ口ニ流入セン。即チ乳房ヲ押スニ、自ズト仏ノ口ニ流入ス」とみえる。法会の場でも好んで語られたに相違ない。とりわけ金刀比羅本の形象はみごとで、左手の摩耶の乳房からほとばしった乳が弧を描いて右手の釈迦の口に入るさまがあざやかに描かれている。大英博物館本やプラハ本は摩耶と釈迦の位置が逆で、絵を見る者の視点がどちらにあるかにかかわる。絵巻を巻く右手側に観者の基本視点があるから、左手から乳が飛んでくる場合は観る者が釈迦側の位置にあり、逆の場合は摩耶側から乳の飛ぶ行方を見守る視点になる。一方、筑波大本や東洋文庫本はほぼ並行の対面的な位置関係になるため、劇性に欠けるきらいがある。

これに関連して注目されるのは、摩耶の授乳がキリスト教のマリアの授乳図と類似する点であろう。中世のロレンツォ・ベネツィアーノ画「聖母子と聖ベルナルドゥス」（ワルシャワ国立美術館蔵）は、右手で赤子のキリストを抱いた聖母マリアが左手で自らの乳をしぼって聖ベルナルドゥスに与えている図であり、ほかにも２，３点例がある。管見の範囲では他の作品でもマリアが左側でベルナルドゥスが右側にいる位置関係は変わらない。二人の関係性は固定化している。テキストによって自在に位置関係が変わる『釈迦の本地』の釈迦・摩耶の二人と対照的である。マリア授乳図の方が時代がさがり、対応関係は不明であるが、西と東の偶合の例として注目される。イソップをはじめ、聖者伝『黄金伝説』に仏伝が混合しているように、おそらくこの場合も仏典から西洋に流入した可能性が高いと思われるが、確証はない。

以上、『釈迦の本地』の図像と物語の関連を中心に、図像学上とりわけきわだつ画面をもつ須弥

山をめぐるふたつの話題、目連が龍蛇に変身して外道を撃退する場面と、釈迦が須弥山頂上の天上界の摩耶の教化におもむき、親子の証明に摩耶が乳を飛ばす授乳の場面とをとりあげてみた。

前者は『法華経』の注釈書『法華文句』に淵源する話題で、よりスペクタクルにダイナミックに物語が仕立てられ、釈迦と外道との最終決戦の様相を呈していた。しかも従来はその絵画化がみられないとされていたものが、新出の伝本によってやはり劇的に絵画化されていたことが明らかになり、あらたな展望がひらけてきたことが証明されたのである。

一方、後者の摩耶の授乳は、仏典からすでに語られていたものの、図像に関しては今まで知られていなかったものが、『釈迦の本地』諸本に集中して描かれていたことが知られ、物語以上に絵画イメージの表現力がいかんなく発揮されていた。ここに仏伝文学としての『釈迦の本地』の特性が表れているとみることができるのである。つまり、言葉だけではなく、絵画と相補しあってあらたなイメージ・テクストが生み出されている、そのことの意義がおおきい。

しかもその絵画形象は同時代の中国の『釈氏源流』の挿絵に対比されるように、中国では授乳の場面をリアルに描くことなど想定し得ないわけで、いかに『釈迦の本地』が自在にその世界を創出しているかがよくわかる。これは東アジアにおいて仏典が聖典（カノン）としての権威を持ち続けていたかどうか、にもかかわり、それが崩れたところからリアルな描写が生み出されたといえよう。

さらにいえば、この摩耶の授乳は西洋のキリスト教の聖者伝にもうかがえ、東西交流のあらわれとして見ることができるのである。

以上、『釈迦の本地』の物語と図像が投げかける問題の射程は深いものがある。絵画はもうひとつの〈物語〉であり、詞書・物語テクストと交差し、相乗したり、増幅交響したり、逆に逸脱し背反したりしつつ、一体化する有機的な運動体としてある。テクストとイメージを二元的に対置するだけではない、あらたな〈絵画物語論〉が要請されるのである。さらなる論の進展を期したい。

【資料（含む、当日映写スライド）】

Ⅰ　仏伝と図像

仏伝＝釈迦の生涯（一代記）、本生譚（ジャータカ）、仏弟子譚、舎利譚

釈迦八相＝下天・託胎・出胎・出家・降魔・成道・転法輪・涅槃（『天台四教儀』）

兜率来儀相・毘藍降生相・四門遊観相・逾城出家相・雪山修道相・樹下降魔相・鹿苑転法相・双林涅槃相（『釈迦如来成道記』道誠注解本、『釈譜詳節』）

●〈物語〉の一原点：仏伝経典から説話集（因縁集）、仏伝物語へ

●メディアミックス：法会文芸の一環として

仏生会（潅仏会）、涅槃会　説経・経釈、歌謡（今様、和讃）、絵解き

●造形、絵画：仏伝図、釈迦八相図、涅槃図、八相涅槃図（壁画、掛幅図、障屏絵）、絵巻、絵本、漫画、映画

Ⅱ　古代の仏伝　寺院、法会

法隆寺・玉虫厨子	雪山童子、薩埵太子（本生譚）	7 世紀
法隆寺・五重塔内陣	涅槃像	7 世紀
『絵因果経』	『過去現在因果経』をもとにした絵巻	8 世紀
『東大寺諷誦文稿』	法会唱導資料　断片的だが、仏伝あり	9 世紀

『李部王記』承平元年（931）	貞観寺堂内＝柱絵　絵解き	10世紀
『三宝絵』永観二年（984）	上巻＝本生譚集成	10世紀
『栄花物語』十七	法成寺御堂＝扉絵	11世紀
『百座法談聞書抄』	法会唱導の聞書	12世紀
金沢文庫本『仏教説話集』	法会唱導の経釈	12世紀
『今昔物語集』天竺部	個々の説話集成による仏伝　三国構成	12世紀
『梁塵秘抄』	今様法文歌	12世紀

Ⅲ　中世の仏伝（写本）　法会から読み物へ　絵画

『釈迦如来釈』	東大寺蔵：長承３年（1134）写	12世紀
『教児伝』	龍門文庫、金剛寺蔵（天台系）：永徳３年（1383）本奥書	14世紀
『釈迦如来八相次第』	慶応大学、華蔵寺、真福寺蔵（上巻存）	14世紀
	華蔵寺本：天文21年（1552）写、康応１年（1389）本奥書	
『釈迦八相』	龍谷大学蔵：建武４年（1337）写？	
	文永10年（1273）本奥書、栄西仮託	
『釈迦の本地』＊	天正９年（1581）写、他→近世の絵巻、絵本、刊本	15,6世紀
『釈迦八相略抄』	龍谷大学蔵	

Ⅳ　近世の仏伝（刊本）　語り物と読み物　挿絵付多し

『釈迦の御本地』	説経節　『釈迦の本地』に近い	万治４年（1661）
『釈迦八相物語』	仮名草子	寛文６年（1666）
『釈迦八相記』	古浄瑠璃　釈迦誕生前史	寛文９年（1669）
『釈迦如来八相一代記』	仮名草子	天和４年（1684）
『釈迦一代記鼓吹』		貞享１年（1684）
『釈迦如来誕生会』	近松浄瑠璃	元禄８年（1695）
『釈迦御一代記絵抄』		文化２年（1805）
『釈迦応化略諺解』		文化２年（1805）
『三世の光』		文化10年（1813）
『釈迦一代実録』		文化12年（1815）
『釈尊御一代記図絵』	北斎画	天保10年（1839）
『八宗起源釈迦実録』		嘉永７年（1854）
『釈迦八相倭文庫』	合巻	
『釈迦如来八相談林』	（未詳）	
※写本『釈尊一代之事』『釈迦八相伝』『八相示現録』『釈迦如来八相伝』等々		

Ⅴ　『釈迦の本地』をめぐる

1　中世仏伝の集約として

○絵巻

スペンサー本	二軸（下巻欠）
金刀比羅宮本	五軸（朝倉重賢筆）

大英博物館本	三軸
岩瀬文庫本	三軸
プラハ国立美術館本	二軸（絵画・詞書別仕立て）
オックスフォード大学本	一帖（元絵巻、絵画のみ）

○絵入り本

天理図書館本（天正９年）	三冊
ボドメール美術館本	二冊
筑波大学本	一冊
大谷大学本	三冊
東洋文庫本	三冊
中野幸一本	五冊
福岡女子大学本	五冊
フランクフルト工芸美術館本	第二冊のみ存（大谷本に絵同じ）
白百合女子大学本	下冊のみ存
個人蔵	絵のみ 12 葉（佐野みどりＨＰ）
＊本文のみの写本及び版本（古活字版、整版）は省略	

2　仏伝物語としての特徴　母子物

①　雪山童子譚	無常偈
②　誕生	
③　母を慕う	無常の自覚　四門出遊（老人・病人・死人・僧）と四方四季
④　提婆達多との弓比べ	ヤシュダラ（耶輸陀羅）との結婚
⑤　出家苦行	入山の際、外道の妨害　従者車匿・愛馬金泥駒との別れ 仙人：法華経 観音の化身 盧舎那仏の化身 薪行道のイメージ（提婆達多品）
⑥　金剛座で成道	菩提樹から金剛座へ　菩提樹の枯れ木を杖に 童子の案内 観自在王仏の化身
⑦　忉利天へ、摩耶の授乳	目連、外道排除　摩耶は帝釈の后 母の菩提とむらう、母の恩徳強調　摩耶夫人の放乳、釈迦の口に入る 母子の証明（天理・天正９年本は授乳の条なし）
⑧　ラゴラとの再会	仏の膝に乗り父子の証明　妻ヤシュダラの貞操証明
⑨　卒塔婆供養	前世の因縁譚（本生譚）
⑩　涅槃	迦葉の遅参
⑪　荼毘	
⑫　仏典結集	阿難の語りと羅漢達の筆録

3　絵巻と絵本の絵画をめぐって

＊金刀比羅本、他	⑦摩耶夫人の授乳とマリアの授乳図 「聖母子と聖ベルナルドゥス」ロレンツォ・ベネツィアーノ

	画（ワルシャワ国立美術館蔵）　→西と東の偶合
＊思文閣本（立教本）	⑦外道と目連、須弥山での対決
＊ボドメール本	④提婆達多の形象　異人図（南蛮屏風、万国人物図）、鬼妖怪図関連
＊大英博本	①雪山童子と鬼　桜、花　　⑩涅槃図
＊筑波大本	⑩涅槃に僧の追記

Ⅵ　東アジアの仏伝

○中国　梁：僧祐『釈迦譜』　　仏伝経典類書　黄檗版

唐：王勃『釈迦如来成道記』　　朝鮮本、和刻本、越南本　東アジアの正典化

明：宝成『釈氏源流』(『釈迦如来応化事蹟』)

＊明・清版、朝鮮本、台湾本、和刻本

○韓国　高麗：『釈迦如来十地修行記』、『釈迦如来行蹟頌』（高麗版、朝鮮版）

朝鮮王朝：『釈譜詳節』、『月印千江曲』、『月印釈譜』（朝鮮版　漢字ハングル交じり）、『釈迦八相録』

＊韓国寺院の八相殿　　仏伝図

Ⅶ　『釈迦の本地』と『釈氏源流』の比較

●『釈氏源流』

・同時代の絵入り本の様相、仏典の規範度

・諸本のひろがり

1　洪熙元年（1425）序　宝成本、重刊：嘉靖35年（1556）版　広東・潮州本

二巻本・四百段　上段・絵　下段・文　仏伝・僧伝主体の仏教史

→複製本（潮州本の北京刊行の後刷本）原所蔵不明　中華書店　1993年

→影印本『中華仏教人物伝記文献全書』第三冊　国家図書館分館編　綫装書局　破損多し　2005年

2　成化22年（1486）序　憲宗本

右・文　左・絵（見開きでは非対照）

乾隆58年（1793）本、重刊：嘉慶13年（1808）版

四巻四百段　右・絵　左・文（見開き対照）　仏伝中心

巻頭・「御製釈氏源流序」「釈迦如来応化事蹟記」（王勃『釈迦如来成道記』）

→複製本『中国古代版画叢刊』二編二輯　上海古籍出版社　1994年

『釈迦如来応化事蹟』巴蜀書社　1998年

3　所蔵諸本

北京国家図書館古籍室

清華大学図書館

天理図書館

岩瀬文庫

4　活字本

梅慶吉編『釈迦如来応化事蹟』黒竜江人民出版社　簡体字　1994年

永珊編『釈迦如来応化事蹟』仏学名著叢刊　上海古籍出版社　1995年
王小明訳注『仏伝（配図本）』学苑出版社　1998年
王儒童注釈『仏伝（釈迦如来応化事蹟）注釈』中国人民大学出版社　2007年
原永珊、金集訳注『釈迦牟尼仏伝』陝西旅遊出版社　2007年
李克和現代語訳・史寛英訳『仏家的伝説』岳麓書社　抄出英訳　2004年
原永珊、王炑・蓮生編『誕生与涅槃　釈迦如来応化事迹』北方文芸出版社
大日本続蔵経・75巻

5　朝鮮版
禅雲寺本系　＝潮州本　　上段・絵　下段・文
三省出版博物館本　一冊本（六丁分を巻子に改装）、版木
憲宗本の「御製釈氏源流序」もあり　1648年刊
→『美術史学誌』３輯　韓国考古美術研究所　2000年
『古版画特別企画展』三省出版博物館　2004年
仏岩寺本系　＝憲宗本　1673年
高麗大学漢籍室、精神文化研究院３点、ソウル大学奎章閣、国立中央図書館、延世大学、東国大学（東国大学、曹渓寺美術館に版木あり）
＊東国大学寄託・金敏栄コレクション　禅雲寺本系４点　仏岩寺本系１点（未見）
＊雅丹文庫２点（未見）
→複製　宝蓮閣　1958年　成均館大学校史学会編か？
※影響　『西域中華海東仏祖源流』　松広寺　1764年
『八相録』:『釈氏源流』から仏伝の１７７段抄出、ハングル版　1845年版

6　和刻本『釈迦如来応化録』
正保５年（1648）絵なし　　早大図書館蔵

Ⅷ　参考文献

黒部通善：『日本仏伝文学の研究』（和泉書院　1989 年）
本田義憲：「今昔物語集仏伝の研究」（『叙説』10　1985 年）
：　「釈尊伝」（『仏教文学講座』６　勉誠社　1995 年）
竹村信治・吉富裕子：「『釈迦の本地』の形成－諸本の整理、福岡女子大学蔵本の位置など」（『香椎潟』33、1987 年）
後藤昭雄：「教児伝－一天台僧の書いた仏伝」（『比叡山の和歌と説話』世界思想社 1991 年）
金　正凡：「釈迦八相図と中世仏伝」（『説話文学研究』32 号 1997 年）
崔ヨンシク：「朝鮮後期『釈氏源流』の受容と仏教界に及んだ影響」（『九山論集』Ｇ１・１号、補助思想研究院　1998 年）
辻　英子：『在外日本絵巻の研究と資料』『続編』（笠間書院　1999 年、2006 年）
林　雅彦：『絵解きの東漸』（笠間書院　2000 年）
ケオリッティデート・ラッダー：「『釈迦如来誕生会』－浄瑠璃的趣向による釈迦伝記の変容」（『国語国文』2003 年 2 月）
渡辺雅子：「日本中世仏伝図の変容－四門出遊を中心にして」（『仏教美術と歴史文化』法蔵館　2005 年）

高橋秀栄：「仏伝歌謡の新出資料－梁塵秘抄法文歌二首を含む」(『仏教美術と歴史文化』法蔵館　2005年)
趙　恩ネ：「韓国における仏伝文学－調査と研究の現状」(『アジア遊学』79号 2005年)
山口好美：「『もくれんのさうし』考－母と子の物語として」(『立教大学日本文学』98 号 2007 年)
小峯和明：「仏伝と絵解き」(『絵解き－研究と資料』三弥井書店　1989年)
：「仏伝と絵解きⅡ」(『絵解き研究』９号　1991年)
：「釈迦如来八相次第について－中世仏伝の新資料」(『国文学研究資料館紀要』17 号 1991年)
：「キリシタン文学と仏伝」(『文学』2001年9,10月)
：『中世仏伝集　真福寺善本叢刊五巻』(解題、臨川書店　2001年)
：「『釈迦の本地』の絵巻を読む－仏伝の世界」(『心』武蔵野大学日曜講演集2004年)
：「東アジアの仏伝をたどる－比較説話学の起点」(『文学』2005年11,12月)
：「仏伝の物語と絵」(『ＣＡＨＩＥＲＳ』２号　アルザス日本学研究所2005年)
：「絵巻のことばとイメージ－『釈迦の本地』をめぐる」(『魅力の奈良絵本・絵巻』三弥井書店　2006年)
：「山階寺涅槃会と本生譚をめぐる－仏伝と〈法会文芸〉」(『三宝絵を読む』吉川弘文館　2008年)
：「東アジアの仏伝をたどる　補説」(『説話・伝承の脱領域』岩田書院　2008年)
：「『釈迦の本地』の絵と物語を読む」(『アジア遊学』109号 2008年)
：「『釈迦の本地』の物語と図像―ボドメール本の提婆達多像から」(『文学』2009 年 9,10月)

＊　なお、思文閣から出た新出の『釈迦の本地』絵入り写本は立教大学の所蔵となった。